

## 潘金蓮論

—歪みゆく性に見る内なる叫び—

はじめに

『金瓶梅』には過剰にして執拗な性描写が見られる。中でも潘金蓮と西門慶との間に繰り広げられる性の描写は、その描かれる回数といい、描写の細かさといい、他の女性達の性描写を遙かに凌駕している。潘金蓮は、「夫亡き後彼女が西門慶の夫人となり、思う存分楽しみをきわめる西門家邸内の春色がこの書物の大部分を占める」、「色欲そのもののような女」、「肉欲狂潘金蓮」、「性的にルーズな女」といった評価が示すように、一般にとっても好色な女性としてとらえられている。実際作品中にも彼女のことを「好色的婦女（好色な女性）」（第一回）、「好偷漢子（間男してばかり）」（第一回）等とする記述が見られ、彼女が好色な女性として設定されていることがわかる。しかし潘金蓮の性描写の展開を仔細に見ていくと、そこからは、彼女が好色であるというだけでは片づけられない作者の設定が浮かび上がってくる。そしてそれは彼女の性描写だけを抜き出してみるのではな

く、前後に見られる事象の中にその性をおいてみることによって初めて、より色濃く浮かび上がってくるのである。本稿では、潘金蓮の性描写を中心に考察を加え、『金瓶梅』の作者は何故彼女に対してこれほど執拗な性の描写を行ったのか、性描写を通して如何なる女性像を構築しようとしたのか、という点に関して考えてみたい。

### 一 飲びの性

蒸し餅売りの不粹な男、武大に嫁がされた潘金蓮は、纏足した小さな脚をさらけ出して男性を誘惑するような女性であった。そんな潘金蓮はふとしたことから街の金持ち西門慶と出会い、隣に住む王婆の仲立ちによって彼と関係を持つようになる。

當下兩個就在王婆房裏脫衣解帶、共枕同歡。但見、交頸鴛鴦戲水、竝頭鸞鳳穿花。喜孜孜連理枝生、美甘甘同心帶結。一個將朱唇緊貼、一個一把粉臉斜偎。羅襪高挑、肩膀上露兩灣新月、金釵斜墜、枕頭

邊堆一朵烏雲。誓海盟山、搏弄得千般嬌妮、羞雲怯雨、揉搓的萬種妖嬈。……

そこで二人はすぐさま王婆の家で衣を脱いで帯を解き、枕を共にして歎びを同じくします。その様子はと言いますと、頸を交えたる鴛鴦は水に戯れ、頭を並べたる鸞鳳は花を穿つ。喜孜孜として連理の枝を生じ、美甘甘として同心の帯を結ぶ。一個は朱唇を緊貼させ、一個は粉臉を斜めに偎す。羅襪高く挑ぐれば、肩膊の上に両湾の新月を露し、金釵斜めに墜つれば、枕頭の辺に一朵の烏雲を堆む。海に誓い山に盟い、搏弄すれば千般の嬌妮、雲を羞しめ雨を怯かし、揉搓すれば万種の妖嬈。……【第四回】

その後二人は王婆の入れ知恵で武大を殺害すると、誰の目をはばかりこともなく逢瀬を重ねるようになる。二人が出逢ったこの頃は、『水滸伝』第二十四回に見られる表現や、詩的にぼかした表現が用いられるなどして、その仲睦まじい性が描写される。

第九回、西門慶の第五夫人に落ち着いた潘金蓮は、西門慶の寵愛を笠に妾同士の争いも乗り越え、西門慶と「似水如魚」の日々を送っていた。ところが第十三回になると、西門慶は隣に住む花子虚の妻李瓶児と関係を持つようになる。そんな二人の關係に気づいた潘金蓮は、一晚中眠ることすらできなかつた。

這潘金蓮歸到房中、番來復去、通一夜不曾睡。到天

明、只見西門慶過來、推開房門、婦人一逕睡在牀上不理他。那西門慶先帶幾分愧色、挨近他牀邊坐下。婦人見他來、跳起來坐着、一手撮着他耳朵、罵道。……

潘金蓮は部屋に戻ると、展転として一晚中一睡もできませんでした。夜が明けると、西門慶がやってきて部屋を覗きますが、女はひたすらベッドに横たわったまま取り合いません。西門慶は幾分恥じ入った表情を浮かべると、ベッドのそばへ寄ってきて腰をおろします。女は彼が寄って来たのを見ると、がばりと跳ね起き、彼の耳をつまんで罵ります。……【第十三回】

烈火の如く怒り狂う潘金蓮だったが、李瓶児が自分の妹分になりたがっていると西門慶に聞かされ、言付かった簪を渡されると、「李瓶児のことを全て報告する」という条件付きで、二人に協力することを承諾する。

第十六回、その日李瓶児のところから戻ったばかりの西門慶の袖口から、見たこともない物が滑り落ちた。潘金蓮はそれを手に取ってみるも、一体何なのか見当がつかない。

婦人認了半日、問道「是甚麼東西兒。怎的把人半邊臍膊都麻了。」西門慶笑道「這物件你就知道了。」

名喚做勉鈴、南方勉甸國出產的。好的也值四五兩銀子。」婦人道「此物使到那裏。」西門慶道「先把他放入爐內、然後行事、妙不可言。」婦人道「你與李

瓶兒也幹來。」西門慶于是把晚間之事、從頭告訴一遍。說得金蓮淫心頓起、兩個白日裏掩上房門、解衣上牀交歡。

女はためつすがめつ眺めた後、尋ねます。「一体何なの。どうして腕がしびれちゃったのかしら。」西門慶、笑って「これは知らないだろう。勉鈴といつて、南の勉甸国（ビルマ）で作られた物さ。いいやつだと四、五両はする。」「何に使うの。」「まずこれをあそこに入れて、それから事を行うと、言い尽くせないほどいいんだよ。」李瓶兒ともやったの。「西門慶はそこで夜の事を一通り話して聞かせました。それを聞いた金蓮、にわかには淫ら心がわき起り、二人は真つ昼間から部屋の戸を閉めると、衣を脱いでベッドに上がり、歡びを交わすのでした。」**第十六回**

李瓶兒との情事の様を聞かされた潘金蓮が、春欲をかきたてられる様子が描かれている。ここからは、潘金蓮の中に芽生えた対抗心を窺うこともできるが、うら若き潘金蓮の、性に対する好奇心とも言うべきものの方が前面に押し出されている感がある。<sup>④</sup>この頃の李瓶兒はまだ潘金蓮を大きく揺るがす存在ではなかったのだ。

李瓶兒を第六夫人として迎え入れた西門慶は、続いて下男である来旺の妻宋惠蓮に手を付ける（第二十二回）。それを知り、またしても怒りを露わにする潘金蓮だったが、宋惠蓮が下手に出て自分に取り入ったことにより態

度を軟化させると、二人の逢い引きに協力して西門慶を喜ばせようとすらすらするようになる。<sup>⑤</sup>

この頃の潘金蓮には、李瓶兒に対しても宋惠蓮に対しても、まだ西門慶との結びつきは自分の方が上だという余裕が感じられる。西門慶が如何なる女性と関係を持つとも、それを全て把握することで、自分は相手の女性よりも優位でいられる。そして相手の女性もそのことを肝に銘じ、潘金蓮に対して下手に出るよう気を使いながらバランスを保っていたのだ。彼女達の存在は潘金蓮の対抗心を刺激するものではあっても、彼女を決定的に脅かすものではなかったのである。

## 二 焦りの性

ところがそんな潘金蓮から余裕が消えていく。第二十回、庭で涼んでいた西門慶のもとへ潘金蓮と李瓶兒がやってくる。ちよつとしたやりとりの後、第三夫人孟玉楼を呼びに行こうとした潘金蓮がしばし席を外したその隙に、残された李瓶兒と西門慶は翡翠軒（数寄屋）にて事を始めてしまう。それを戻ってきた潘金蓮が盗み聞きするのである。

只聽見西門慶向李瓶兒道「我的心肝、你達不愛別的、愛你好個白屁股兒。今日儘着你達受用。」良久、又聽的李瓶兒低聲叫道「親達達、你省可的擺罷。奴身上下不方便。我前番乞你弄重了些、把奴的小肚子疼起

來、這兩日纔好些兒。」西門慶因問「你怎的身上不方便。」李瓶兒道「不瞞你說、奴身中已懷臨月孕、望你將就些兒。」西門慶聽言、滿心歡喜、說道「我的心肝、你怎不早說。既然如此、你爹胡亂耍耍罷。」……都被金蓮在外聽了個不亦樂乎。

西門慶が李瓶兒に言っているのが聞こえます。「可愛い子ちゃん、お父さんは他のところはともかく、お前の真つ白いお尻が好きなんだ。今日はお父さんの好きなようにさせてもらおうぞ。」しばらくすると、今度は李瓶兒が低い声をあげるのが聞こえます。「お父さま、激しくしないで。体の具合がよくないの。この前の時は強めにしてちょうだいって頼んだけれど、下腹が痛くなってきちゃって、このところようやくちよつと良くなったばかりなのよ。」「どうして具合が悪いんだい。」「本当のことを言うと、もう臨月の身なの。だから勘弁してちょうだい。」「西門慶はそれを聞いて大喜び。「可愛い子ちゃん、どうして早く言わないんだ。そういうことなら、お父さんもまあ適当にしておくことにしよう。」「……これらは外にいた金蓮にすつかり聞かれてしまいました。【第二十七回】

こうして李瓶兒の懐妊が明かされる訳だが、潘金蓮はその一部始終をすつかり聞いてしまうのである。潘金蓮と西門慶が葡萄棚での淫行を繰り広げるのは、この直後のことであつた。

(西門慶) 回來、婦人又早在架兒底下鋪設涼簟枕衾停當、脱的上下沒條絲、仰臥於衽蓆之上。脚下穿着大紅鞋兒、手弄白紗扇兒搖涼。西門慶走來看見、怎不觸動淫心。于是乘着酒興、亦脱去上下衣、坐在一涼墩上、先將脚指挑弄其花心。……一面又將婦人紅綉花鞋兒摘取下來、戲把他兩條脚帶解下來、拴其雙足、吊在兩邊葡萄架兒上。……于是向水碗內取了枚玉黃李子、向婦人牝中內一連打了三個、皆中花心。……又把一個李子放在牝內、不取出來、又不行事。急的婦人春心沒亂、淫水直流。……

(西門慶が) 戻ってくると、女はすでに葡萄棚の下に寝ごさを敷いて枕と布団を整え、一糸まとわぬ姿で仰向けに寝ておりました。深紅の靴を履き、白い紗の扇子を動かして涼んでおります。それを見た西門慶、淫ら心を刺激されないわけがありませんか。酒に酔った勢いで、またしても着物を脱ぎ捨てると、陶器の腰掛けに座り、まずは足の指でその花心をかからかいます。……その一方で女の紅い刺繡靴をもぎ取った上、戯れに彼女の両足の纏足帯を解くと、その両足に帯をくくりつけて、葡萄棚の両側に吊します。……そして茶碗の中から玉黄スモモを取り出し、女の牝内めがけて続けざまに三個投げつけたところ、三個とも花心に命中しました。……今度はスモモを一つ牝の中に入れて、それを取り出しもしせず、事を行おうともしません。じらされた女は春情かき

乱れ、淫液がたらたらと流れ出ます。……【第二十  
七回】

この場面は非常に有名であるが、ここでは特にその挑発するような潘金蓮の姿態、そして様々な淫行を繰り広げる二人の姿が注目に値する。西門慶に焦点を当ててみた場合、この場面からは彼の異常なまでの性欲、アブノーマルともいえる嗜好が浮かび上がってくる。ところが潘金蓮に焦点を当ててみた場合、そこから浮かび上がるのは、決して快樂を求めただけの潘金蓮の姿ではない。それは続く第二十九回の場面と併せて見ることによってよりはっきりとわかる。

婦人赤露玉體、止着紅綃抹胸兒、蓋着紅紗衾、枕石鴛鴦枕、在涼席之上、睡思正濃。房裏異香噴鼻。西門慶一見、不覺淫心頓起。……原來婦人因前日西門慶在翡翠軒誇獎李瓶兒身上白淨、就暗暗將茉莉花蕊兒攪酥油定粉、把身上都搽遍了。搽的白膩光滑、異香可掬。使西門慶見了愛他、以奪其寵。……

女は紅い生糸の胸あてだけを身につけて、肌を露わにしたまま、紅い紗の布団を掛けて石の鴛鴦枕を当て、寝ごぞの上でぐっすり眠っていました。部屋にはよい香りが漂っています。一目見た西門慶、思わず淫ら心がわき起こります。……なんと女は先日西門慶が翡翠軒にて李瓶兒の体が白く美しいことを褒めたが為に、人知れず茉莉花の蕊をバターとおしるいに混ぜ、それを体中に塗りつけていたのでした。

塗った肌は白くきめ細かくつるつるとしており、えもいわれぬ香りにあふれています。それを西門慶に見せて喜ばせ、寵愛を奪い取ろうとしていたのです。……【第二十九回】

先の翡翠軒にて、西門慶が李瓶兒の白い肌を褒めたことを心に留めていた潘金蓮は、ひそかに体を白く塗り、西門慶の心を自分に向けようとするのである。つまり翡翠軒から続く一連の行為は、その裏に李瓶兒への対抗心が窺える設定になっているのだ。潘金蓮の中で、李瓶兒への対抗心が沸々と燃えたぎり始めていたのだった。その李瓶兒は第三十回、長男の官哥を出産する。

這潘金蓮聽見生下孩子來了、合家歡喜、亂成一塊、越發怒氣生。走去了房裏、自閉門戶、向牀上哭去了。潘金蓮は、子供が生れて家中が大喜び大騒ぎしているのを耳にすると、ますます怒りがこみ上げてきます。部屋に戻って戸を閉め、ベッドの上に泣き伏してしまいました。【第三十回】

歎びに沸き返る西門家の一角で、誰の目に映ることもなく、ひとり泣き伏す潘金蓮の姿が描き出される。しかしそんな潘金蓮をよそに、官哥の誕生を喜ぶ西門慶は連日李瓶兒の部屋へ泊るようになる。

單表潘金蓮、自從李瓶兒生了孩子、見西門慶常在他房宿歇、于是常懷嫉妬之心、每蓄不平之意。さてこちらは潘金蓮、李瓶兒が子供を産んでからというものの、西門慶がいつも彼女の部屋に泊まるもの

ですから、常に嫉妬の心を抱き、日々不平の気持ち  
を募らせておりました。【第三十二回】

潘金蓮の心は穏やかではない。たまに西門慶が自分の部  
屋を訪れると、何とか彼をつなぎ止めようと必死になる。

那金蓮聽見漢子進他房來、如同拾了金寶一般。……  
枕畔之情、百般難述、無非只要牢籠漢子之心、使他  
不往別人房裏去。

金蓮は男が彼女の部屋にやってきたと聞くと、まる  
で金の宝でも拾ったかのようです。……枕もとの  
情事は、あの手この手と述べ尽くせませんが、とも  
かく男の心を籠絡し、他の女の部屋へ行かせまいと  
するものに他ならなかったのです。【第三十三回】  
この頃、西門慶が李瓶児の部屋へ行つたことをしつこく  
下男や女中に確認し、それを耳にする度にショックを受  
ける潘金蓮の姿が幾度となく描かれる。第三十八回、潘  
金蓮はその夜も外出先から帰ってくる西門慶をひとり待  
ちわびていた。

(潘金蓮) 又喚春梅過來「你去外邊再瞧瞧、你爹來  
了沒有。快來回我話。」那春梅走去、良久、回來說  
道「娘還認爹沒來哩。爹來家不耐煩了、在六娘屋里  
吃酒的不是。」這婦人不聽罷了、聽了如同心上戳上  
幾把刀子一般、罵了幾句「負心賊」、由不得撲簌簌  
眼中流下淚來。一徑把那琵琶兒放得高高的、口中又  
唱道、

……常記的當初相聚、癡心兒望到老。(誰想今日

他把心變了、把奴來一旦輕拋不理、正如那日。)

被雲遮楚岫、水滄藍橋。打拆開鸞鳳走「交」。(到  
如今、當面對語、心隔千山。隔着一堵墻、咫尺不  
得相見。) 心遠路非遙、(意散了、如鹽落水、如  
水落沙相似了。) 情疎魚雁杳。(空教我有情難控  
訴。) 地厚天高、(空教我無夢到陽臺。) 夢斷魂勞、  
俏冤家這其間心變了。「合」想起來、心兒裏焦、  
誤了我青春年少。你撇的人、有上稍來無下稍。

(潘金蓮は) またもや春梅を呼び寄せます。「おま  
えもう一度外へ行つて、旦那さまが帰つて来たかど  
うか見ておいで。急いで報告しに戻るんだよ。」見  
に行つた春梅、しばらくすると戻つてきて言います。  
「奥さまはまだ旦那さまがお戻りになつていないと  
でも思つてらっしゃるんですか。旦那さまはお戻り  
になるとすぐに、六奥さまのお部屋で飲んでいらつ  
しゃるじゃありませんか。」女は聞かなければよか  
つたものを、聞いて心はいくつもの刃物が突き刺さ  
つたかのようになり、「裏切り者」と罵つては思わ  
ず涙がぼろぼろ流れ落ちます。そしてひたすら琵琶  
を高くとかき鳴らし、再び唱います。

……忘れもしないわあの頃は、いつも一緒だった  
わね、共白髪までと願つたわ。(あいつが心変わ  
りをして、あたしを突然捨て去るなんて思つても  
みなかった。まるであの時みたい。) 楚山は雲に  
遮られ、藍橋すっかり水浸し。鸞と鳳とは引き裂

かれ、顔も見えなきや会えもせず。(今じゃ向かい合つて話していても、心は遠い山の彼方。堀ひとつ隔てているだけ、すぐそこにいるのに会えないのね。) 近くににいるのに心は遠く、(気持ちはすっかりバラバラで、水に落ちた塩みたい、砂に落ちた水みたい。) 気持ちは離れて便りもない。

(未練があるから訴えることもできないわ。) 大地は厚く天高く、(夢の中でも陽台には行けない。) 夢は途切れて気は疲れ果て、愛しいあんたは心変わり。(合唱) 想えば心はじりじり痛む。この美しき青春を、あたしは踏み外したのやら。捨てられちまったこのあたし、この先どうすりやいいのやら。【第三十八回】

ここには潘金蓮の揺れる想いが、閨怨詩の流れを継ぐ散曲のスタイルを用いて連綿と綴られている。二人の関係は昔とはすっかり変わってしまった、待っているだけではもう西門慶は戻ってこない、そんな絶望ともあきらめともいべき心境が描き出されている。こうして自らの境遇をはっきりと悟った潘金蓮は、これより後、西門慶が李瓶児の部屋へ行ったことを知っても、怒りはすれど涙するようなことはなくなる。と同時に、李瓶児母子に対する嫉妬を激化させ、西門慶との性にも更なる変化を見せるようになるのである。

### 三 歪んだ性

「丫鬟に粧し 金蓮 愛を市う」と題される第四十回、その日西門慶が役所から帰つてくると、潘金蓮が女中の扮装をして夫人達とふざけていた。

西門慶因見金蓮裝扮丫頭、燈下艶粧濃抹、不覺淫心蕩漾、不住把眼色遞與他。這金蓮就知其意、行陪着吃酒、就到前邊房裏。

西門慶は、女中の扮装をした金蓮が、灯下に美しく着飾り厚化粧をしているのを見ると、覚えぬ淫ら心がわき起こり、しきりに目配せをいたします。金蓮はすぐにその意を察すると、お相伴をした後、早速表の部屋(金蓮の部屋)へと向いました。【第四十回】

こうして一時的に西門慶の「愛を市う」ことに成功した潘金蓮ではあったが、結局彼を自分のところに繋ぎとめておくことはできなかった。実はこの頃、西門慶は李瓶児母子に寵愛を注ぎつつも、外では西門家の番頭である韓道国の妻王六児と密通を繰り返していた。「後庭花」を好むという性癖を持つ王六児をすっかり気に入ってしまった西門慶、以後も韓道国黙認の下、彼女との逢瀬を楽しむこととなる。

そんなことは知らない潘金蓮は、ある日、自分の部屋に置いてあったはずの淫具が持ち出されていることに気づく。

且説潘金蓮那邊、見西門慶在李瓶児屋里歇了、自知

他偷去淫器包兒和他耍頑、更不體察外邊勾當。是夜暗咬銀牙、關門睡了。

さて潘金蓮の方は、西門慶が李瓶兒の部屋で休んだのを見ると、彼が淫具の包みを盗み出したのは李瓶兒と楽しむ為だったのかと思ひこみ、外での所業には全く気づきません。その夜はひそかに齒がみをし、門を閉めて休みました。【第五十回】

実際は王六兒と楽しむ為に持ち出された淫具であったのだが、誤解をした潘金蓮は、ますます李瓶兒への嫉妬を募らせる。第五十一回、その淫具の件でさんざん嫌味を並べ立てる潘金蓮をなだめすかしつつ、彼女と長い交戦を繰り広げる西門慶だったが、胡僧にもらった媚薬が効きすぎたせいもあって、その日は結局満足するには至らなかった。翌日、再び潘金蓮の元を訪れた西門慶は、潘金蓮に「後庭花」を迫る。

西門慶把兩個托子都帶上、一手摟過婦人在懷裏、因說「你達今日要和你幹個後庭花兒、你肯不肯。」那婦人睨了一眼、說道「好個沒廉恥冤家。……」……婦人被他再三纏不過。……婦人在下蹙眉隱忍、口中咬汗子難捱。……

西門慶は托子を二つとも装着すると、女を懷に抱き寄せます。「お父さんは今日お前と後庭花をしたいんだが、いいかね。」女は一目見やり「なんて恥知らずな人なの。……」……しかし何度もまとわりつかれた女は折れてしまいます。……女は男の下で眉

をひそめてじつとこらえ、ハンカチを噛みしめて堪え忍びます。……【第五十二回】

いくら王六兒との交渉を通してその味を占めていたとはいえ、これまで「後庭花」は、それを好む王六兒、及び男妾（書童）と行う以外、誰にも強要したことはなかった。西門慶は、自分の快樂の為だけに、それを嫌がる潘金蓮に迫るのである。ここには、しぶしぶ承諾した潘金蓮が、苦痛に耐えながらそれを受け入れる様が描き出されている。「後庭花」は、この一連の流れの中に位置づけて見ることによって、決して潘金蓮の好色さによるものではないことがわかる描かれ方になっているのである。

こうして何とか西門慶をつなぎ止めようと躍起になる潘金蓮は、一方で禍根である李瓶兒母子への嫉妬もエスカレートさせてゆく。自分の女中である秋菊を虐待することでも間接的に李瓶兒を当てこすったり（第四十一回、第五十八回）、正妻呉月娘と李瓶兒とを仲違いさせようとしたり（第五十一回）、官哥をおびえさせたり（第十二回）と、嫉妬の牙をむき出しにする潘金蓮は、第五十九回、ついに飼ひ猫を飛び付かせて官哥を死なせてしまふ。

看官聽說、常言道「花枝葉下猶藏刺、人心怎保不懷毒」。這潘金蓮平日見李瓶兒從有了官哥兒、西門慶百依百隨、要一奉十、每日爭妍競寵、心中常懷嫉妬不平之氣、今日故行此陰謀之事。馴養此猫、必欲誑



死其子、使李瓶兒寵衰、教西門慶復親于己。

皆さんお聞き下さい。ことわざにも「花も葉裏に刺  
隠し、人も心に毒懐く」といいますが、李瓶兒が官  
哥を産んでからというもの、西門慶が何でも彼女の  
いう通り、一を要すれば十を奉ずるといった様子を  
常日頃目の当たりにしている潘金蓮は、日々妍を競  
って寵を争い、常に嫉妬や不満の気持ちを抱いてお  
りましたが為に、今日このはかりごとを実行に移し  
たのであります。この猫を飼い慣らしておけば、必  
ずあの子を驚かして死なせることになるだろう、そ  
うすれば李瓶兒の寵を衰えさせ、西門慶の愛を再び  
自分に向けさせることができるだろう（と考えたの  
でした）。【第五十九回】

西門慶への執着に取り憑かれた潘金蓮は、もはや嫉妬の  
鬼と化していた。更に彼女は、官哥の死を嘆き悲しむ李  
瓶兒にも精神的ストレスを与え続け、死にいたらしめる  
のである（第六十一回）。

これでようやく西門慶を取り戻せる、そう思ったのも  
つかの間、李瓶兒を忘れきれない西門慶は、彼女の部屋  
で乳母として使われていた如意に手を付けてしまふ。  
西門慶説「我兒、你原來身體皮肉也和你娘一般白淨。  
我摟着你、就如同和他睡一般。……」

西門慶は言います。「可愛い子、お前の体もお前の  
奥さまと同じように白くてきれいだな。お前を抱い  
ていると、まるで彼女と寝ているみたいだ。……」

### 【第六十七回】

西門慶にとつて、李瓶兒と同じく白い肌を持つ如意は、  
まさしく李瓶兒の身代わりだった。そんな如意の存在は、  
潘金蓮にとつて新たな脅威に他ならない。

（潘金蓮）自從李瓶兒死了、又見西門慶在他屋裏把  
奶子也要了、恐怕一時奶子養出孩子來、挽奪了他寵  
愛。

（潘金蓮は）李瓶兒が亡くなって以降、西門慶が今  
度は彼女の部屋の乳母にまで手を着けてしまったも  
のですから、ふと乳母が子供でも産んだりしたら、  
寵愛を奪い取ってしまうのではないかと恐れます。

### 【第六十八回】

何としても如意に先を越されるわけにはいかない潘金蓮  
は、呉月娘が尼にもらった薬を飲んで懐妊したことを聞  
き出すと、自分にも同じ薬を調達してくれるようその尼  
に頼み込む。そんな潘金蓮は第七十二回、西門慶が東京  
へ出かけている間に、如意のちよつとした言動に怒りを  
爆発させ、彼女に掴みかかってしまふ。孟玉楼になだめ  
られて何とかその場は収まったものの、部屋に戻った後  
も孟玉楼に如意への怒りをぶちまける潘金蓮だった。

（潘金蓮）說道「……你看、一向在人眼前花哨星那  
樣花哨、就別模兒改樣的。你看、又是個李瓶兒出世  
了。……你如今不禁下他來、到明日又教他上頭腦上  
臉的。一時桶出個孩子、當誰的。」

（潘金蓮）「……見てごらんなさいよ、このところ

人前で目立ちたがり屋の派手女みたいに浮ついちゃって、すっかり変わっちゃったじゃないの。ごらんですよ、また李瓶児が現れたんだよ。……今あいつを押さえつけとかなないと、この先また調子に乗らせることになるわよ。ふと子供でも生んだりした日には、何様になるかわかりやしない。」【第七十二回】

如意という李瓶児の影に対して、彼女の焦りはもはやピクに達していた。そんな中、西門慶が東京から戻ってくる。

婦人在房内濃施朱粉、復整新粧、薰香澡牝。正盼西門慶進他房來。滿面笑容、向前替他脫衣解帶。……交接後、淫情未足、定從下品鸞簫。這婦人的說「話」無非只是要拴西門慶之心。又況拋離了半月、在家久曠幽懷、淫情似火、得到身、恨不得鑽入他腹中。那話把來品弄了一夜、再不離口。西門慶要下牀溺尿、婦人還不放、說道「我的親親、你有多少尿、溺在奴口裏。替你曠了罷。省的冷呵呵的熱身子。你又下去凍着、倒值了多的。」這西門慶聽了、越發歡喜無已、叫道「乖乖兒、誰似你這般疼我。」……

女は部屋の中で厚化粧をし、身なりを整えると、香を焚きしめて牝を洗います。そこへちやうど西門慶が入ってきました。女は顔中に笑みを浮かべたまま、進み出て着物を脱がせ帯を解いてやります。……終わってもまだ淫ら心が満たされない女は、下から簫を吹きます。この女の話は、ただもうとにかく西門

慶の心を繋ぎとめようとするものに他なりません。ましてや半月もほったらかしにされ、ずっと家に閉じこめられたまま思い詰めていたわけですから、淫ら心は火の如く、西門慶の体を手に入れたが最後、彼のお腹の中にもぐり込めないのがもどかしいくらいでした。あれを握りしめて一晩中吹き、何が何でも口から放そうとしません。西門慶はベッドを下りて用を足そうとしますが、女はそれでも放さず、こう言います。「ねえあなた、おしっこがしたいんだったら、あたしの口の中にしなさいな。飲んであげるから。暖まった体を冷やさなくてすむわ。下りて寒い思いをしてどうするのよ。」それを聞いた西門慶はますます大喜び、「いい子ちゃん、お前みたいにおれのことを想ってくれるやつは他にいないよ。」……【第七十二回】

潘金蓮は、用を足しに行こうとする西門慶を放さず、何と自らの口で受け止めるのである。その直後には、次のようなコメントが付されている。

看官聽說。大抵妾婦之道、故惑「蠱惑」其夫、無所不至。雖屈身忍辱、殆不爲恥。

みなさんお聞き下さい。たいてい妾というものは、夫を蠱惑せんが為には、何だつてやるのです。身を屈して恥を忍んでいても、ほとんど恥とも思わないのです。【第七十二回】

彼女がこれほど屈辱的な行為に及んだのも、全て西門慶

を繋ぎとめる為に他ならなかったのだ。しかし一方の如意も負けてはいなかった。

西門慶告他說「你五娘怎的替我唾半夜、怕我害冷、連尿也不教我下來溺、都替我嘔了。」老婆道「不打緊。等我替爹吃了就是了。」……

西門慶は彼女に言います。「五奥さまは夜中吸ってくれている時、寒いといけないからって、小便をしても行かせず、全部飲んでくれたんだよ。」「大したことないわ。ひとつ私も旦那さまの為に飲んで差し上げましょう。」……【第七十五回】

ここに描かれるのは、もはや単に好色な女性としての潘金蓮、如意ではない。潘金蓮にとっては、李瓶児母子がようやくいなくなってくれたというのに李瓶児の身代わりの存在が現れたのである。一方自らの主人であった李瓶児が潘金蓮にさんざんな目に遭わされ、とうとうそのストレスから死に至るまでを間近で見してきた如意も、黙って潘金蓮に屈するわけにはいかない。互いに負けるわけにはいかない、女同士の闘いなのである。

しかし潘金蓮にとって闘いの相手は如意だけではなかった。第七十五回にはついに呉月娘との争いが勃発、表面上何とか沈静化するものの、懐妊の企みも失敗に終わる、もはや彼女は後がないところにまできていた。一方そんな潘金蓮にはお構いなしの西門慶、以前からできていた王六児、林太太との密通を繰り返すのみならず、下男の妻達にまで手を出す。ところが第七十九回、王六

児との楽しみを終えて帰る途中、西門慶は突然黒い影に襲われ、すっかり下半身が萎えてしまっているところを潘金蓮の部屋に担ぎ込まれる。待ちかまえていた潘金蓮は、あの手この手で西門慶を奮い立たせようとするが、何をやっても効果がない。

(潘金蓮)「更不在誰家來。」翻來覆去、怎禁那慾火燒身、淫心蕩意。

(潘金蓮は)「二体誰のところへ行つたのかしら。」と寝返りを打つばかりで、欲情は身を焦がし、淫ら心はどうにもおさまりません。【第七十九回】

潘金蓮はとうとう弱っている西門慶に適量以上の媚薬を飲ませてしまう。挙げ句、西門慶は陰茎から血が止まらなくなり、死に至ることとなる。西門慶に執着し続けた潘金蓮の性は、ついに西門慶をも死に追いやってしまったのである。

潘金蓮の性は変化を見せた。しかもそれは単なる横並びの変化ではない。彼女の性は、状況の変化、それに伴う「心」の変化と密接に絡み合いながら、歪んでいったのである。西門慶への執着が、彼女の性を、「心」を歪ませていったのだ。そして潘金蓮にとって、自らの性を歪ませる程までに執着した「冤家(愛しい人)」「西門慶、そんな彼をこの世から消し去ることになったのも、他ならぬ潘金蓮だった。執着の過程で、官哥、李瓶児と次々に邪魔者を死に追いやっていった潘金蓮の、その執着の果てが西門慶殺しだったのである。

潘金蓮の性描写は西門慶の死を以て終わるわけではない。西門慶の死後、彼女は娘婿陳經濟と交わりを結ぶことになる。

婦人黑影里抽身、鑽入他房内、更不答話、解開裙子、仰臥在炕上、雙鳧飛肩、交陳經濟奸耍。……二載相逢、一朝配偶。數年姻眷、一旦和諧。一個柳腰款擺、一個玉莖忙舒。耳邊訴雨意雲情、枕上說山盟海誓。鶯恣蝶採、嬌妮搏弄百千般、狂雨羞雲、嬌媚施逞千萬態。……

女は暗闇を抜けて彼の部屋に入り込むと、何も言わずに裙子を脱いで炕の上に仰向けになり、両足を陳經濟の肩にかけて始めさせます。……二載の相逢、一朝にして配偶す。數年の姻眷、一旦にして和諧す。一個は柳腰を款ろに擺らし、一個は玉莖を忙しく舒ばす。耳邊にて雨意雲情を訴え、枕上にて山盟海誓を説く。鶯は恣じり蝶は採じ、嬌妮しく搏弄すること百千般。雨を狂わし雲を羞かしめ、嬌媚く施逞る千万の態。……【第八十回】

ここに描き出されるのは、直前までのあの切羽詰まった、歪みきった性ではなかった。西門慶と潘金蓮が出逢った頃の性に戻ったのである。西門慶への執着から解放された潘金蓮は、彼と出逢ったあの頃のように、ただ欲情に身を委ね、恋する男との性を謳歌しさえすればよかったのである。これ以降も潘金蓮と陳經濟との様々な性が描かれるが、西門慶との間に見られたような歪んだ性が描

かれることはもうなかった。

以上、潘金蓮の性が徐々に歪んでいく様相を呈していることが確認できた。彼女が好色な女性として描かれていくことはまぎれもない事実である。しかしその歪みゆく性の姿から浮かび上がるものは、単に快楽を貪るだけの彼女の変化によって歪みゆく、彼女の「心」そのものでもあった。「性」は潘金蓮の「心」を映し出す鏡でもあったのだ。

### おわりに

本稿では、潘金蓮の性が変化していくこと、しかもそれは単なる変化ではなく、西門慶に執着するが故に歪んでいくものであり、その歪みゆく性を通して、彼女の内なる叫びが浮かび上がる仕組みになっていることを指摘した。

『金瓶梅』という作品は何故作られたのか、『金瓶梅』が描こうとしたものは一体何だったのか。筆者は別稿にて、『金瓶梅』という作品は、『水滸伝』においては「英雄」に斬り殺される対象でしかなかった「淫婦」に目をとめた作者が、「英雄」の物語を「淫婦」の物語に仕立て直し、彼女達の声を聞こうとした物語だった、と論じた。『水滸伝』において、潘金蓮はすでに義弟武松に色目を使い、西門慶と密通するような淫女であった。つま

り『金瓶梅』という作品が成立する時点ですでに彼女が好色な女性であることは決まっていたのである。『金瓶梅』の作者はそんな彼女に執拗且つ過剰な性描写を施し、より徹底的な淫女潘金蓮を作り上げた。しかし同時に、その執拗なる性描写を通して、彼女が淫乱化し、地の底まで墮ちていく必然、過程をも描いてみせたのである。潘金蓮はまぎれもない淫女であり、妬婦であり、殺人者である。しかし彼女は何故そうなってしまったのか。『金瓶梅』は、かつて誰も問うことのなかった、その「何故」を描こうとしたのである。

『金瓶梅』が成立した明清の時代には、『如意君伝』『肉蒲団』といった一群の好色小説が刊行されている。<sup>④</sup>『金瓶梅』の性描写の背景にも、こうした当時の潮流との関係が窺えよう。しかし『金瓶梅』に描かれる性は単なる興味本位的なものに終わらない。<sup>⑤</sup>中でも潘金蓮という「悪女」の「心」の動きがその性を用いて表現されている点は、特筆すべきことだと言えよう。

女性、それも所謂「悪女」と呼ばれる女性の微妙な「心」の動きを様々な角度からリアルに描き出した『金瓶梅』の出現は、中国文学史上、計り知れない意味を持つものであったと言えるのではないだろうか。

### (注)

① 順に、武田泰淳「淫女と豪傑―『金瓶梅』と『水滸伝』―」

(「象徴」2、一九四七、後『武田泰淳全集』筑摩書房一九七二所収)、吉川幸次郎「中国文学入門」(『中国文学入門』弘文堂一九五一、後『中国文学入門』講談社一九七六所収)、黄霖『《金瓶梅》漫話』(学林出版社一九八六)、日下翠『金瓶梅―天下第一の奇書―』(中公新書一九九六)。

② 原文は『金瓶梅詞話』(大安影印本)に拠った。尚、馮其庸顧問、白維国・卜鍵校注『金瓶梅詞話』(岳麓書社一九九五)を参照し、誤字と思われるものは「」で訂正し、脱字と思われるものは「」で補った。

③ 上記引用文は『水滸伝』第二十四回にあるものとほぼ同じ文章である。

④ 例えば第十三回にも、春面を見ながら李瓶児との行為に及んだ話を聞かされた潘金蓮が欲情にかられる場面が見られる。尚この頃の性描写は、その行為自体はあまり詳しく描かれないう傾向にある。

⑤ しかし最終的には、宋惠蓮の夫来旺の暴言に激怒した潘金蓮が彼を流罪に追いやったことが原因で、宋惠蓮は縊死することとなる。

⑥ 第二十七回葡萄棚の場面は、先行する黄色小説『如意君伝』の影響を受けていることが、P. D. Hanan 「Sources of the Chi n Ping Mei」(『Asia Major』N. S.』vol X Part I、一九六〇) ↓荒木猛訳「金瓶梅の素材」(『長崎大学教養部紀要(人文科学編)』35―1、一九九四)等にて指摘されている。

⑦ 同様の指摘は、井波陵一『《金瓶梅》の構想』(『東方学報』58、一九八六)等にも見られる。

- ⑧ 「正如那日」の「那日（あの時）」とは、第八回、第三夫人孟玉楼を輿入れするにあたり、西門慶の足が潘金蓮のもとから一時的に遠のいた頃のことを指していると思われる。
- ⑨ この回では、実に四首にも及ぶ散曲にて潘金蓮の心情が描き出される。引用したのは第三首目のみである。
- ⑩ 潘金蓮の性描写がその人物描写と関わっていることに言及しているものとしては、李時人「論《金瓶梅》的性描写」、田秉鐔「《金瓶梅》性描写思辨」、呂紅「《金瓶梅》的突破与失落——《金瓶梅》性描写的文化批判」（いずれも『中国古代小说中的性描写』百花文艺出版社一九九三）、張競『恋の中国文明史』（ちくまライブラリー90、一九九三）、尹恭弘「《金瓶梅》与晚明性文化的畸形化发展」（『《金瓶梅》与晚明文化』華文出版社一九九七）、霍現俊「金瓶梅性描写的歴史与文化批判」（『金瓶梅新解』河北教育出版社一九九九）等があるが、潘金蓮の性が徐々に歪んでいくこと、そしてそれが彼女の心の変化と密接に関わっていることについて論じられたものは、管見の及ぶ限り見あたらない。
- ⑪ 「『金瓶梅』の構想——『水滸伝』からの誕生——」（『日本中国学会報』56、二〇〇四）
- ⑫ 孫楷第『中国通俗小说書目』（人民文学出版社一九八二）卷四・明清小説部乙・艷粉・猥褻部参照。
- ⑬ 王汝梅『金瓶梅探索』（吉林大学出版社一九九〇）にも『金瓶梅』寫性行爲服從於人物的性格、命運的描寫、放在從屬地位。『肉蒲团』寫性事放在突出地位、中心地位。」との指摘が見られる。